2024年10月13日 聖霊降臨節 第22主日 礼拝メッセージ

「立場主義を越えて生きる」　　牛田匡牧師

聖書 士師記 11 章 29−40節

皆さんは「犠牲」という言葉を聞いて、何を感じたり、連想されたりするでしょうか。何か大きなことや大切なことをやり遂げるために、何かを犠牲にする……。そのようなことは、私たちの身近な所でも、よく見たり聞いたりされることではないかと思います。さらに「誰かのために自らの命を犠牲にした人」は、人々に記憶され、称賛されたりします。小説はもちろん、テレビや映画、アニメやドラマでも、自分の命を犠牲にしてでもみんなを守るという主人公、ヒーローの姿が描かれることは少なくなりませんし、そのような場面に感動を覚えるのも事実です。歴史的な実話としても、そのようなお話はいくつもあります。ナチスドイツの強制収容所の中で、ガス室に送られる人の身代わりとなったコルベ神父。逆走する列車を自らの身を投じて停止させた長野政雄さん（『塩狩峠』のモデル）。その他にも、凶器を振りまわす暴徒に果敢に立ち向かった人や、燃え盛る火災現場に、人命救助に向かう消防士など、他人のために自らの命をかける人々のお話は、聞く人の心を揺さぶるものがあります。「ヨハネによる福音書」には「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（15：13）というイエス様の言葉があり、実際イエス様はその言葉の通り、十字架での処刑に至ったように、敵対者、反対者たちからいくら憎まれようとも、神と人とを大切にするというその歩みを止めませんでした。

しかし、その一方でそのような感動が、非人道的な目的に悪用されることもあります。今も世界各地で続いている自爆テロや無差別テロもそうですし、「特攻」と呼ばれた旧日本軍の自爆攻撃もそうでした。そこで実際に命を落とされた一人一人が、どのような思いであったかには目を向けず、ただ人のため、お国のために戦死した、殉死したということで、勝手に靖国神社に祀った挙句に、戦争を知らない為政者たちが、「英霊に敬意と哀悼の意を表するのは当然だ」などと言うのは、それこそ敬意に欠けていることなのではないかと思います。

そのように、現代社会の中でも、あちこちで耳にする「犠牲」ですが、もともとは人や神に献げる「いけにえ（生贄）」として、世界中の様々な民族で行われていたようです。とりわけ古代イスラエル社会では、「ヘブライ語聖書」の中の律法に様々な「いけにえ」が規定されていました（レビ記 1−7 章他）。例えば、神への感謝、神との交わり、罪の贖いなどとして、牛、山羊、羊、鳩などを献げるなど、「いけ

にえ」は宗教的に重視され、人々の日常の一部となっていました。そのようなことを背景として、今回の聖書のお話、士師エフタとその娘の話はありました。

「士師記」の中には、士師と呼ばれるリーダーに率いられて、古代イスラエルの民が他民族と戦争をするお話がいくつも記されていますが、今回のエフタも、そのような士師の一人でした。エフタについては「士師記」11 章と 12 章に記されています。彼はギルアド人の力ある勇士でしたが、社会からはつまはじきにされた生活を送っていました。というのも彼は父ギルアドが遊女に産ませた子だったからです（11：1）。そのために彼は父の財産を受けつぐこともなく、異母兄弟たちから追い出され、別の土地で暮らしていました。ところが数年後、アンモン人が攻めて来るということになり、ギルアドの町の長老たちがやって来て、彼に「指揮官になってほしい」、さらに全住民の頭となってくれるようにと懇願しました。それを受けて、彼はギルアドの軍を率いて、アンモン人と戦い、勝利を収めます。

しかし、その際、彼は神に対してある誓願を立てていました。それが 30 節です。もしこの戦いに勝利して、無事に帰還できれば、家の戸口に初めて迎えに出て来る者を「焼き尽くすいけにえ」として献げます、というものでした。そして続く 34 節で、戦争に勝利して帰還した彼を出迎えたのは、よりにもよって彼の一人娘でした。彼は自分の衣を引き裂いて嘆き悲しみますが、娘は「お父様、あなたが主に対して口を開かれたのなら、どうか、その口から出たとおりのことを私に行ってください」（36）と言って、自身が「焼き尽くすいけにえ」として、殺されて、献げられるということに同意しました。ただし、彼女はその前に 2 ヶ月間の猶予を求め、彼女は友人たちと一緒に山々を歩き嘆き悲しみました。そして 2 ヵ月後に、彼女は誓願通りにいけにえとして、殺され献げられました。

こんな残酷で悲しいお話が、どうして聖書に載っているのか。ここから私たちは、どんなメッセージを読み取り、受け取ることが出来るのか。様々な意見、解釈があるようです。例えば、「エフタもその娘も、親子の絆、愛情よりも、神様との約束を優先させたから立派な信仰だ」というのも一つの読み方でしょう。ですが、エフタも嘆き悲しみ、少女もまた 2 ヶ月間、山々を巡って友人たちと嘆き悲しんだと、わざわざ記してありますから、もしも恐れず、迷わず、避けられない運命を引き受けるというのであれば、それらを記さずに、即断即決で事足りたはずです。

また別の解釈では、殺されて「焼き尽くすいけにえ」にされるのが、仮にエフタの一人娘ではなかったとしても、「家の戸口から迎えに出て来るもの」を献げるとい

うのですから、彼の仲間か、家来か、奴隷か、誰かを殺すことが想定されていました。そもそも「人身犠牲」は、古代イスラエルの律法では異教的な習わしとして、厳しく禁じられていました（レビ記 18 章、申命記 12 章）。ですから、その誓願の言葉を耳にした彼女は、父親にそのような恐ろしい行為を止めさせるために、二度と繰り返させないために、自らの命を差し出したというのです。しかし、34 節にあるように、彼女は、父親が戦場から帰還した時、戦勝を喜び祝って、タンバリンをもって踊りながら出迎えました。そのような喜びの姿からは、「他の家の者が犠牲にならないために、自分が自ら犠牲になる」という重い決意を胸に秘めていたようには思えません。

むしろ私は、このお話は「信仰的な美談」などではなく、逆に「繰り返してはならない悲劇」として読むべきではないかと感じています。一読すると、父親と一人娘との間には、親子の愛情があるかのように読めるかもしれませんが、エフタが嘆いているのは、35 節で「ああ、わが娘よ。あなたは私を打ちのめし、私を苦しめる者となった」と言っている通り、娘の身を案じてのことではなく、自分自身の身、ひいては自分の家、一族・子孫の行く末を案じてのことでした。聖書の中に限らず、古代社会では、ほとんどの女性はその名前が記録され、記憶される事なく、「〇〇の娘、妻、母」というように、あくまでも男性の付帯物、所有物のように扱われています。そしてエフタも、娘のことを当然そのように考えていましたし、またエフタの娘自身も、生まれた時からずっとそのように扱われて来ていたために、そのことを疑わなかったでしょう。だからこそ自らが「焼き尽くすいけにえ」として殺され、献げられることに同意した、同意せざるを得なかったのだろうと思います。

しかし、そのような「家父長主義」「男性中心主義」「お家中心主義」「立場主義」が、聖書全体を貫く命の神のメッセージなのか、というと、もちろんそんなはずはありません。結婚前の一人娘を犠牲にして、子孫を残すことが出来なかったエフタの一族は、ここで絶えることになりました。そして父親によって殺された彼女は、夫も子も持っておりませんでしたので、本来ならば記録もされず記憶も残されなくてもおかしくなかったにもかかわらず、2 ヶ月間友人たちと山々を巡って嘆き悲しみ、そして彼女の死後も、イスラエルの娘たちは毎年 4 日間、彼女のことを覚え、悼み、偲んで歌を献げるようになった、と記されるに至りました。それは家父長として、不必要な犠牲を強いたエフタの愚かな蛮行への、静かなる抵抗として聖書の中に残されたと見るべきではないでしょうか。

この後、士師の時代の後も、古代イスラエル社会では、律法に定められている通り、動物を犠牲として献げる祭儀は盛んに続けられていました。ですが、後に続いた預言者たちは、形としての祭儀よりも倫理を重視し、動物供儀よりも一人一人の砕かれた心を重視しました（イザヤ 1：11－17 他）。さらに時代は下って、新約聖書の「福音書」の中にも、神殿ではいけにえ用として鳩や羊や牛などが売られていましたが、イエス様が怒ってそれらの商人たちを追い出したというお話もありました（ヨハネ２他）。そして何より、十字架に架けられて殺されたイエス様自身が、最大の犠牲、神に献げられた「最後のいけにえ」となられたと、理解されています（ヘブライ 7：27）。さらにイエス様の犠牲は、その命の死で終わりではなく、十字架での処刑から三日後に、死から引き起こされました。それがまさに「犠牲」の終わり、もう「犠牲を繰り返さなくてもよい」ということを、全ての人に告げてくれています。「暴力」がある所には、暴力と憎しみの連鎖が生まれるように、犠牲が要求される所には、また新たな犠牲が生まれます。自らの娘に犠牲を強いたエフタの暴力も、その根源は異母兄弟たちからのけ者にされ、排除された所から始まっていたのではないでしょうか。

そもそも、私たちは日々、自分の命を生きているでしょうか。それとも自分以外の人が用意した「立場」を生きているでしょうか。日本ではこれまで、中世・近世の「家父長主義」「お家中心主義」から転じた「立場主義」だったと言われています（安冨歩）。そこでは一人一人の思いは顧みられず、ただ国家を守るため、立場を守るための駒のようにして、人は管理され動かされていた。自分自身は犠牲になっても、国家に尽くし、会社や組織に尽くすことが、称賛され、美徳とされて来ましたし、また自分たち自身でもそのように思い込んで来ました。しかし、どうでしょうか。その思い込みは正しかったでしょうか。暴力は新たな暴力を、犠牲は新たな犠牲を生み出します。今一度、自分たちの歩みを止め、これまでの歩みを振り返る時に来ているように思えてなりません。

私たちは誰かを犠牲にしたり、犠牲になるように強いたり、また自分自身が何かの犠牲になることに甘んじていたり、諦めていてはいけないのではないかと思います。聖書が伝えている命の神のメッセージは、誰かが犠牲になることではなく、全ての命が活き活きと生きられるように、解放されることです。知らない間に私たちを真綿でくるみ、息苦しくさせているような立場主義を乗り越えて、解放されて生きられるように、今日も私たちは神様と共にあって導かれて行きます。